

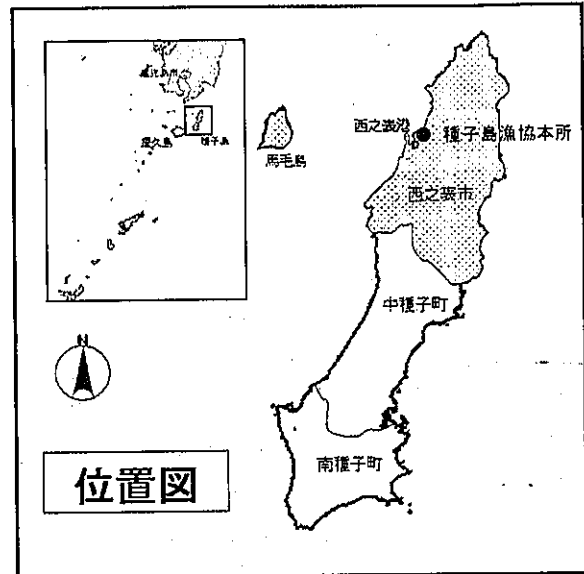
アサヒガニ資源の復活をめざして

種子島漁業協同組合 長瀬 誠

1 地域の概要

鉄砲伝来とロケットの打ち上げで知られる種子島は鹿児島市から南へ115km、高速船で1時間半の距離にあり、黒潮の恵を大きく受けアサヒガニ、トコブシ、キビナゴ、トビウオ、アオリイカなどの特徴のある水産資源が豊富なだけでなく、温暖な気候でサトウキビやサツマイモなどの農産物の栽培も盛んな自然の魅力にあふれた島である。

また、最近ばサーフィンやダイビングなどのマリンスポーツでも人気を集めている。



2 漁業の概要

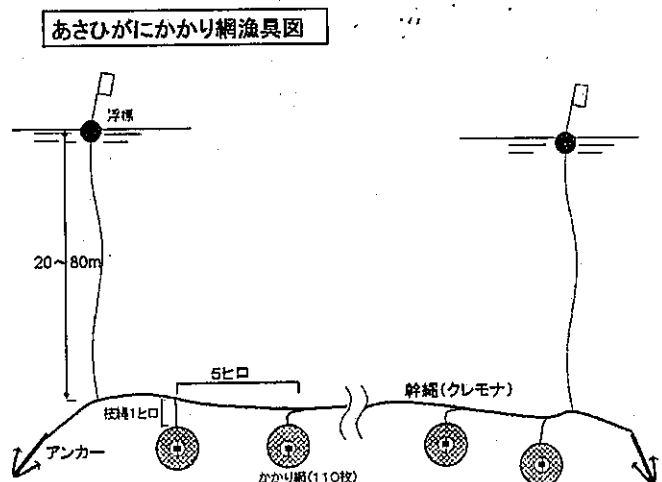
種子島漁業協同組合は平成16年度の組合員数が631名（正329名，准302名），水揚げ量が2,057トン，水揚げ金額が8億7千9百万円で，一本釣，磯建網，トコブシ漁，キビナゴ刺網，トビウオ漁，アサヒガニかかり網漁などの特徴のある漁業が行われている。

また，アサヒガニかかり網漁は現在18隻が操業しており，16年度は漁獲量が3.3トン，漁獲金額が889万円であった。

3 アサヒガニかかり網漁業の紹介

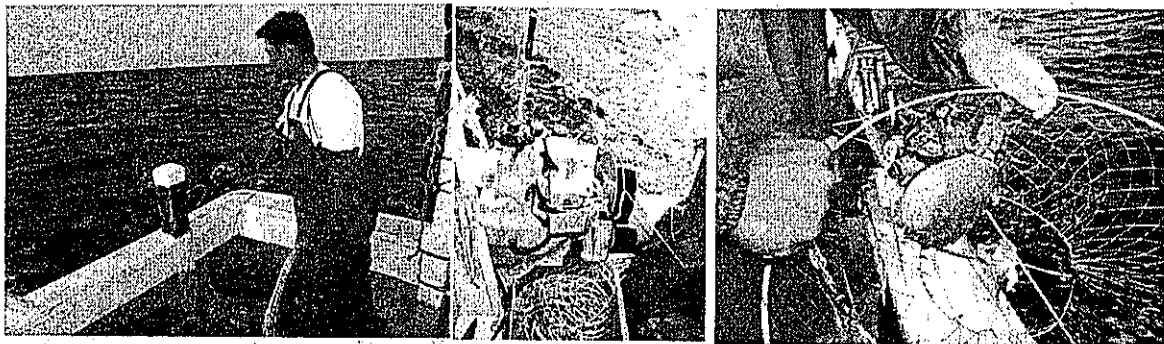
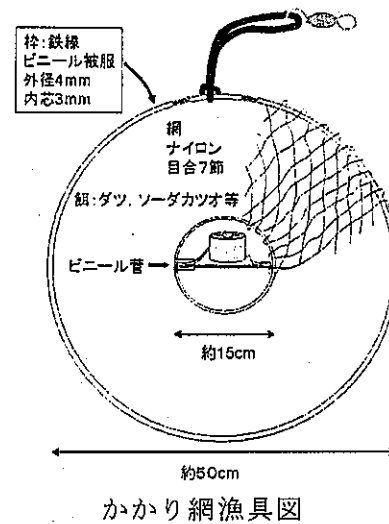
アサヒガニは日本では相模湾から九州・沖縄の水深15～120mの砂地に分布し，特に種子島海域で多く漁獲されている。

漁具は幹縄にかかり網と呼ばれる円形の網が110個付いた仕掛けを二組使用する。



円形のかかり網の中央部にはステンレス製（φ3mm）の針金で作った金具に餌が仕掛けられており、餌に食いついたアサヒガニが砂に潜ろうとしたとき網に絡まる仕掛けになっている。

操業はこの二組のかかり網漁具の投網と揚げ縄を交互に1日に7～8回行う。



投縄

揚げ縄

漁獲状況

4 帰郷の動機と独立までの経緯

(1) 帰郷の動機

種子島の西之表市に生まれた私は父も漁師であったことから、子どもの頃から海に親しみ、高校を卒業する頃には夢がふくらみ、遠洋マグロ延縄漁船に乗り込み世界の海で操業してみたいと考えるようになった。しかし、父の賛同を得られず漁業は断念したが、船に乗ることが出来る海上自衛隊に入隊した。

海上自衛隊では護衛艦「はるな」で勤務したが、漁業への夢は絶ちがたく3年目に種子島に帰り父の船に乗ることを決意し、すぐに小型船舶と無線の免許を取得し帰郷した。

(2) 独立までの経緯

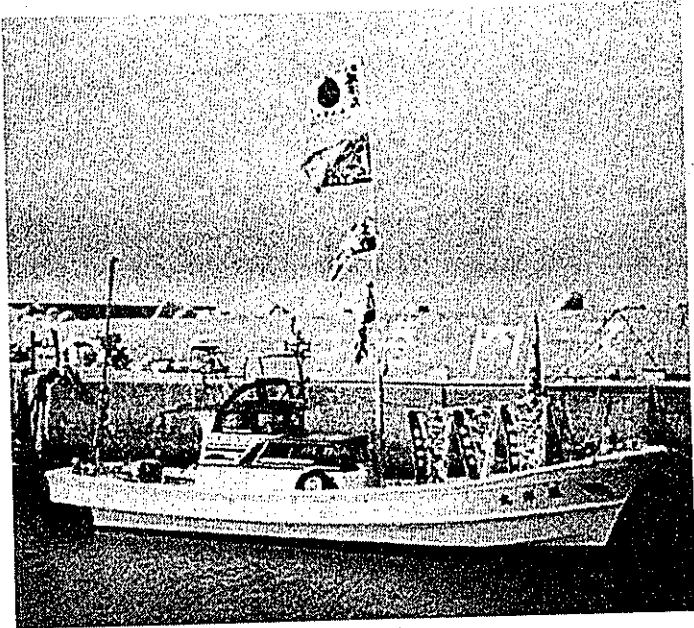
帰郷後は父と共にアサヒガニかかり網を中心に、立て縄や底延縄を行う一方で、ひとりでモジャコ漁船やトビウオロープ曳き漁船にも乗船し経験を積んでいった。

しかし、種子島の海で30年以上も漁業を行ってきた父との技術の差は歴然としており、1日も早く実力を備えた漁師になりたいとの思いから毎日、操業日誌をつけて自分

なりに漁場等の分析をしていくことに努めた。

独立したきっかけは、10年目に父から「漁業技術も上達したので、そろそろ一人で操業してみてもいいのではないか。」というアドバイスを受けたからである。

独立には多少の不安もあったが、たまたま、船速は遅いが安定性の良いアサヒガニかかり網漁向きの中古漁船が売りに出ているので、青年漁業者等育成確保資金により購入し、独立することが出来た。



第3鳳洋丸 4.9トン

(3) 青年部活動

帰郷と同時に漁協青年部の藻場造成や魚食普及活動などに参加したことにより、先輩方から漁業技術に関する指導も受けることが出来た。

また、平成16年度からは増殖機能を備えたイカ産卵礁の設置を行い、設置した産卵礁の90%以上にアオリイカの産卵が確認された時にはその成果を部員全員で喜び合えた。



朝市での販売活動



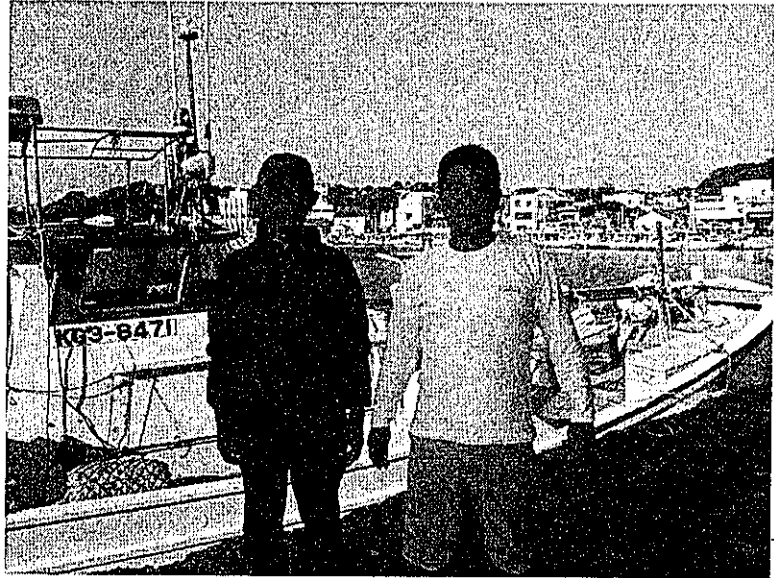
イカ産卵礁設置



アオリイカ産卵状況

(4) 独立後の経営

独立後はアサヒガニ
かかり網（11～3月）を
中心に、モジャコ漁（4
～5月），トコブシ漁
（5～6月），立て縄（6
～10月）を組み合わせ
て行っている。アサヒ
ガニ漁では漁具をカニ
のいるポイントに設置
することが重要であり、
日ごとに漁場が変化
するために操業場所
の選定には苦労してい
る。

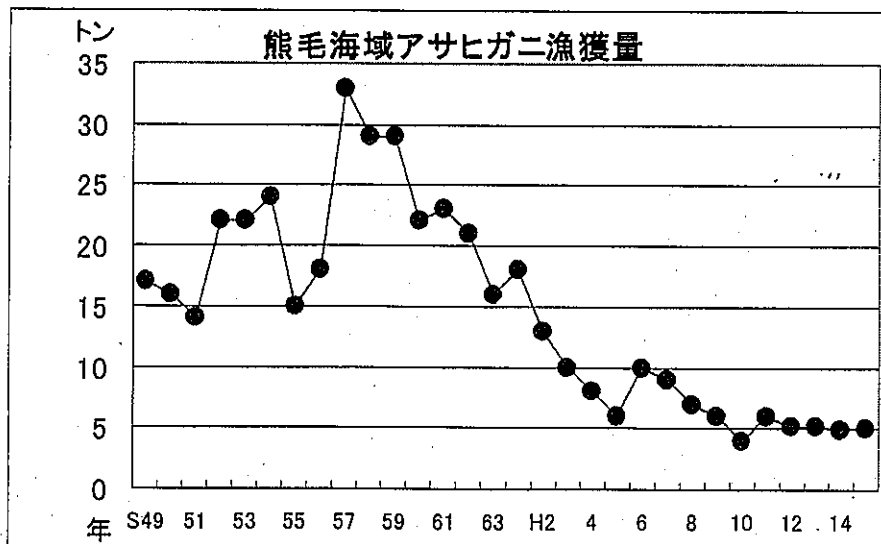


独立前までは、父から与えられた仕事をしていれば良かったが、今は自分自身で考えて行動しなければならない。やりがいや漁のおもしろさを感じている反面、自分で獲らなければ赤字になってしまう。昨年の夏に結婚したこともあり、今は家族に対しての責任も強く感じているところである。

5 アサヒガニ資源管理の取り組み

(1) 県及び熊毛における資源管理

アサヒガニの漁獲量は昭和50年代後半には熊毛海域全体で30トン前後の漁獲があったが、近年は5トン前後と低調である。



鹿児島県漁業調整規則では、禁止期間が6月1日から7月31日までとなっているが、熊毛海区漁業調整委員会指示では、資源が減少を続けていたことから制限を強化し、5月1日から9月30日までを禁止期間としている。

制限規則	制限内容
鹿児島県漁業調整規則 「漁業許可等に関する取り扱い方針」 (鹿児島県)	禁止期間：6月1日から7月31日まで 使用漁船：10トン以下 漁具積載量制限：かかり網300枚以内
熊毛海区漁業調整委員会指示	禁止期間：5月1日から9月30日まで 体長制限：甲長8cm以下は採捕禁止

(2) 種子島における自主的な資源管理の取り組み

種子島海域では、10月下旬まで抱卵したアサヒガニが多く見られることから漁業者の自主的な話し合いのもとに操業禁止期間を更に延長し10月と4月も禁漁とした。

また、かかり網の使用枚数を220枚以内とするとともに、操業時間についても申し合わせを行った。

自主管理取り決め内容
自主禁漁：10月、4月
漁具積載量制限：かかり網220枚以内
操業時間：日出から日没まで

(3) 複合的資源管理型漁業促進対策事業の取り組み

複合的資源管理型漁業促進対策事業において実施した鹿児島県水産技術開発センターと鹿児島大学水産学部の共同研究に、種子島のアサヒガニかかり網の漁業者が協力して、平成12年度から調査を重ねてきた。

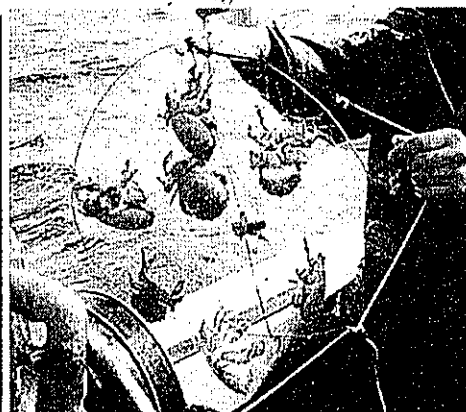
① かかり網漁業の問題

アサヒガニかかり網漁業が抱える資源管理上の問題として網にかかったアサヒガニの食害や8cm以下の小型のアサヒガニが混獲されてしまうことがあげられるが、網にかかった小型のアサヒガニの取り外し作業は時間がかかり、漁獲効率を低下させる骨の折れる作業である。

このため、小型個体の混獲防止と取り外し作業を効率的に行うことが出来るかかり網の開発が求められていた。



食害を受けたアサヒガニ



混獲された小型アサヒガニ

②改良網の試作

小型のアサヒガニの混獲を減らし、網外しの作業を軽減するとともにカニに損傷を与えにくい網を目指して、目合いの大きさや網糸の太さを変えたかかり網が試作され、従来の網との比較試験が実施された。

その結果、最適な改良網が提案されこれを使用することにより、小型個体の保護に役立つとともに作業効率が向上し安全な作業が可能になることが分かった。

(4) これまでの資源管理を生かした私の実践

①抱卵ガニや小型ガニの再放流

抱卵したアサヒガニや甲長8cm以下の小型のアサヒガニが混獲された場合は全て放流している。

網からの取り外しは非常に手間がかかり根気の要る作業であり、漁の作業効率も大幅に低下するが、「カニを傷つけてしまったら放流しても生き残らない。1尾でも多く生き残って欲しい。」と思いながらこの厄介な作業を行っている。



漁獲された抱卵ガニ

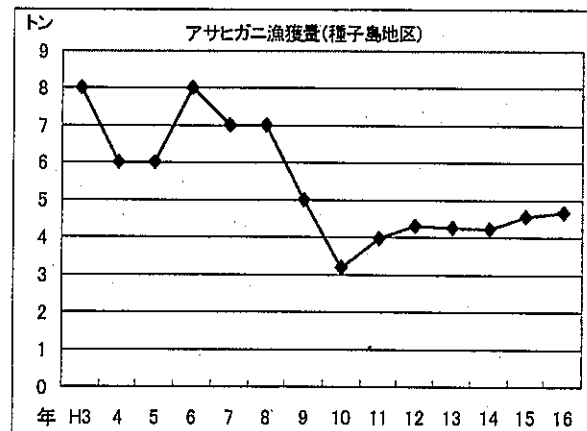
②開発されたかかり網の使用状況

現在、漁具の一部を開発されたかかり網に取り替えて作業を続けている。開発されたかかり網は一定の作業効率の向上が実感できるものの、①餌を固定する針金が中心に長く伸びているためにカニの取り外しや餌付けに支障がある②網を重ねたときに不安定である③網が修理しにくいといった改良点があると感じている。

これまでのところ開発されたかかり網でのアサヒガニの漁獲はあまり多くはないが、引き続き開発されたかかり網を用いた作業を継続して私なりのデータを収集し、更なる改良を図っていきたいと考えている。

(5) 自主的な資源管理の取り組みの成果

種子島地区のアサヒガニ漁獲量についてみると、平成10年度までは減少傾向にあったが自主的な資源管理を開始した11年度以降は操業者が減少しているにも拘らず、漁獲量が少しずつ増加傾向を示している。つまり、操業者一人当たりの漁獲量が増加しつつ、全体の漁獲量も増加しており、これはこれまでの地道な資源管理の取り組みの成果ではないかと考えている。



6 魚価対策

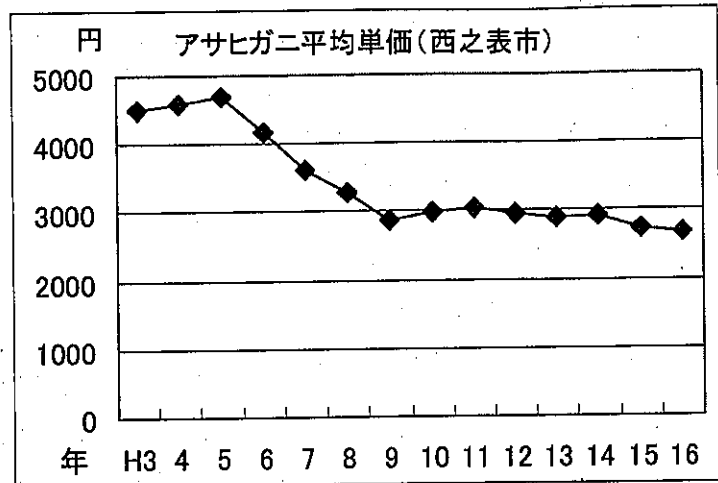
平成6年まではキロ当たり4000円を超えていた西之表市のアサヒガニの価格は平成9年以降3000円前後になり、平成15年以降は3000円を下回るようになった。

さらに、今年度の漁期はこれまでのところ平均単価が2000円前後で推移している。これは店頭にいつもある、輸入アサヒガニの影響が大きい

と思われるが、アサヒガニ資源の管理と並んで魚価安定のための対策が急務となっている。

青年部でも結束して独自に魚価の安定のために、青年部のそれぞれが種子島の漁業の顔であるとの認識のもと、今回の実績発表大会に合わせて地域の特産魚の販売・広報の活動を鹿児島市内で行っている。

種子島漁協では直販施設の「お魚センター」で他の水産加工品とともに冷凍や活魚のアサヒガニを販売しているが、今後は、青年部や漁協等の関係者と連携して、輸入アサヒガニに負けない地元の資源のよさをアピールして魚価の安定につなげていきたいと考えている。



7 今後の取り組み

(1) 後継者としての漁業技術の確立

父から受け継いだアサヒガニの漁業技術に更に磨きをかけて先輩に早く追いつくように努力していくとともに、アサヒガニの禁漁期間における他の漁業との組み合わせを工夫し、スピードは出ないが頑丈な私の「第三鳳洋丸」のように、自分もがんばっていききたい。

また、種子島のアサヒガニ漁業者では私が最年少であり、この特徴的な漁業の魅力や資源管理の成果をいろいろな形で発信し、今後ともアサヒガニ漁業を持続させていきたい。

(2) 資源管理の実践

これまでの先輩方や関係機関が努力してきた資源管理の取り組みにより、西之表市をはじめ種子島地区のアサヒガニ漁獲量は増加傾向に転じた。

この成果を生かし、今後とも網にかかった抱卵ガニや小型ガニの再放流に努めるとともに、開発されたかかり網を使用しながら資源管理と操業の効率化の取り組みを実践していきたい。

そして、地域のアサヒガニ漁業者の連携を深めるために話し合いや共同作業などにも積極的に参加し、今後とも資源管理の取り組みを継続して漁業の現場に根付かせていきたいと考えている。